

東北紀行

Tohoku Travelogue

第12号/2017年1月/編集：宮原育子（宮城学院女子大学）

東北・仙台これからの観光について

(株)たびむすび/(株)ゆいネット 稲葉 雅子

1. 震災後の東北観光の背景

私が観光に関する活動や仕事を始めたのは、2008年のことでしたが、日本に「観光庁」が設置されたのも、ちょうどこの年でした。しかし、11年に東日本大震災が発生、海外からの誘客どころか国内旅行すら憚られる時期となりました。12年に閣議決定された「観光立国推進基本計画」は、「震災からの復興」をはじめ「国民経済の発展」「国民生活の安定向上」「国際相互理解の増進」の4つの方針を掲げ、5年計画で実施されることになりました。

観光に力を入れる背景には、震災からの復興とともに、日本の人口減少という大きな問題があり、定住人口の減少を交流人口で補おうという考えがあります。2014年に観光庁が発表した資料⁽¹⁾によると、日本の定住人口1人当たりの年間消費額は平均で124万円、これを日帰りの国内旅行者の消費で補う場合83人分、宿泊をする国内旅行者で補う場合26人分、海外からの旅行者であれば10人分が必要という計算です。したがって、日本の人口減少を補うためには、なんとか観光や出張などでの来訪者を、全国的に増やしていかなければならないということになります。同資料によると、日帰りの国内旅行者1人1回当たりの消費額は約15,000円、宿泊をする国内旅行者1人1回あたり約48,000円。東日本大震災により、人口減少が加速している東北地域こそ、なんとか交流人口を増やしていきたいところです。しかし、東北地域は面積が広いため二次交通が不便なところが多く、宮城・岩手・青森・福島は、日帰り旅行者の半数以上が同じ県内からの旅行者であり、自地域の定住人口の不足額を自地域で補っていることとなります。

2015年宮城県観光統計⁽²⁾によると、宮城県全体で15年の観光客入込数は約6,066万人で、前年より323万人増加したものの、10年に最多であった入込数の6,129万

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku 人にはまだ足りていません。しかも、前年比で圧倒的に入込数が伸びているのは旧仙台市の地域です。

2. 女川町の場合

震災で甚大な被害を受けた女川町の場合には、2010年に約70万人あった入込数が、11年に4万人弱まで落ち込みましたが、15年には38万人まで回復しています。女川町の津波による町内の住宅被害は、3,888戸で町全体の約85%に至ります⁽³⁾。人口は、11年2月末時点で10,016人でしたが、12年2月末には8,376人で、16年10月末には6,770人となり、11年からの差異は3,246人で、30%以上人口が減少しています⁽⁴⁾。

平地の少なかった女川町は、女川駅、マリンパル、女川温泉ゆぼっぼ、その他多数の地域資源が被災しました。2012年、旅館や民宿を営んでいた人たちがトレーラーハウスで「宿泊村エルファロ」として営業を再開、15年3月には女川駅とゆぼっぼが再開、新たな地域の資源がうまれました。同年、女川駅前に「テナント型商業施設シーパルピア女川」がオープンし、スペインタイルの工房や漁業体験施設、ダンボールで作られた車「ダンボルギーニ」を展示する店、飲食店など、商店街を回遊し楽しむことができるようになりました。海産物を販売していた「おかせい」では飲食ができるような設備を整え「女川井」を提供、そのボリュームが話題となりここをめぐってくるお客様も増えています。また、新たな地域の資源には様々な体験メニューがあり、スペインタイルの工房では、見本を見ながら2時間程度での絵付け体験ができます。三陸のわかめや炭などを素材にした石鹸作り体験、ホタテ捌きや牡蠣むきなどの魚介類の体験、漁船によって養殖現場を見に行く体験、笹かま工場見学と手焼き体験、被災時の様子を伺う語り部体験など、種類も豊富です。



※スペインタイル見本



※笹かま手焼き体験

参考に、これらの地域資源がどのようにお金の価値に換わるのかツアールートとして設定し計算をしてみました。

仙台発女川へのサンプルツアールート

内容	金額
仙台駅→女川駅	¥1,140
漁業体験	¥2,700
昼食	¥1,500
食後のコーヒー	¥300
スペインタイル絵付け体験	¥2,700
ゆぽっぽで入浴	¥500
笹かま手焼き体験	¥216
お土産	¥5,000
女川駅→仙台駅	¥1,140
	¥15,196

仮に、仙台駅から鉄道で出発して女川に向かったとして、昼食・体験・お土産購入で合計約 15,000 円となり、観光庁で発表した日帰り旅行者の 1 日 1 人あたりの消費額とほぼ同額となります⁽⁵⁾。

問題は、人口減少を交流人口で補うという点です。震災後、3,246 人が減少した女川町の場合、果たして何人の交流人口が必要となるのでしょうか。定住人口 1 人の減少を補うために、日帰りの国内旅行者は 83 人分が必要です。3,246 人を日帰り客で補うと考えると、269,418 人が必要で、金額にすると約 40 億円が必要です。2015 年の入込数が約 38 万人ですから、単純計算をすれば、57 億円ということになります。女川を訪れる人が必ずしも女川で 15,000 円を使うわけではありません。サンプルのツアールートでは 1,140 円×2=2,280 円が JR 運賃ですので、

JITR(Japan Institute of Tourism Research)-Tohoku 女川町内での消費は 12,916 円です。来町者の 38 万人全員が、この金額を消費してくれたなら、49 億円となります。しかし、人口減少が進めば進むほど、町は交流人口を増加させ、消費額を増やすことを考えなくてはなりません。

3. 南三陸町の場合

南三陸町の場合、震災前の 2010 年に 100 万人以上の入込数がありましたが、11 年に約 36 万人まで落ち込み、15 年には 80 万人まで回復しました。人口推移は、11 年 2 月末に 17,666 人でしたが、16 年 6 月末時点では 13,669 人と減少しており、11 年からの差異は 3,997 人減となっています⁽⁶⁾。震災以前より「観光まちづくり」を提唱してきた南三陸町では、震災により被災した地域の資源も多々ありましたが、震災後に新しくできた資源もあり、観光復興に一役かっています。新たな資源の代表的なものは「福興市」であり、11 年 4 月末という震災後早い段階で開始された物産市ですが、その後定期的に開催されており、16 年 12 月の福興市で 63 回を数えることになりました。

4. おわりに

南三陸町も女川町も、人口減少を交流人口で補おうとすると、入込客全員が平均消費金額以上を町内で消費する仕組みをつくる必要があります。地域資源を活かした体験メニューの造成や、地域の中を観光するまちあるき観光ルートの造成、魅力的な食材や飲食店、これらをうまく組み合わせ福興市のように定期開催している催しと連動させることで、地元消費につながるリピート参加が可能な仕組みが出来上がります。交流人口を増やすことと、地元消費を拡大できる資源の開発育成と、両方を同時進行していくことが、これからの東北の観光に必要なことではないでしょうか。

注

- (1) 観光庁「観光に関する取組みについて 2014 年 11 月 18 日」
- (2) 宮城県観光統計概要 (2015 年 1 月～12 月)
- (3) 女川町発表 2011 年 7 月 1 日時点
- (4) 女川町人口統計ホームページより
- (5) 体験などは 2016 年の金額で、変更の可能性あり
- (6) 南三陸町人口統計ホームページより

*2016 年 12 月 7 日の石巻専修大学講義の要約。